

ラワン製品の鮮滿臺灣進出	一四四
競争激湛利益減殺さる	一四五
北海雜木取扱と現地視察旅行	一四六
ベニヤ板保税工場 大江合板設立	一五一
井桁藤商店増資	一五二

公職關係に就いて

愛知縣ベニヤ板工業組合設立	一六一
---------------	-----

結びの言葉

一七六

附録

香港・中南支遊行記

.....	一七七
-------	-----

巻後に題す

編者	二〇一
----	-----

吾が思ひ出の記

父祖の業

祖先は代々愛知縣西春日井郡清洲須町に住ひ農を業とした、のち曾祖父たる

加藤市兵衛の代となるや、文化の頃居を名古屋に移し古渡村に一戸を構へて農を營み屋號を井桁屋と稱した。それより再び七間町二丁目に轉宅し、明治六年八月二十八日八拾才を以て歿す、曾祖母は、きよう、と稱し明治七年十二月一日七十才で死去せり。

祖父は加藤半七と稱し七間町に生れ市兵衛の女婿であつたが、父祖の業を繼ぐを好まず演藝方面に多大の趣味を有し、九代目團十郎、西川流の始祖西川鯉三郎らと交遊旺んにして不識不知の裡に其趣味を助長するところ尠からず、興行界に雄飛せん事を企圖し、爲に家業を等閑に附し、其子忠平(著者の父)と意見の懸隔を生じ、兎角家庭の圓滿を欠きたるため別居を策し、本家を門前町に移して、子忠平のみ分家として七間町に居住した。

門前町に移り住むと共に、今の松竹座、當時の若宮末廣座を買收して、店員二十數名を

置き屋號を幕半と稱して大々的に衣裳屋を開業し、遠く江戸、京洛の地に舟又は駕を飛ばして往復し、東奔西走、名古屋を中心に三州吉田、岡崎、伊勢の贄崎（今の津）、岐阜等各地に於て九代目成田家、成駒家鷹次郎一家等に依つて歌舞伎興行を続け一時は非常な成功を遂げ、家運隆盛に向ひつゝありしに、好事魔多しの例に漏れず、明治十七年には米不作のため農村の疲弊著るしく、ために世は恐ろしき恐慌を來たし、不況のドン底を呈した、この難局に際會し、時偶々末廣座に於て九代目成田家を座頭に福助（今の歌右衛門）らをもつて興行させたところ大人の日は木戸錢十錢にして非常なる盛況を呈したるも二日三日と殆んど觀覽者少なく、遂に成田家はあまりの事に「二度と名古屋には來ネー」と江戸前の啖呵を残して駕によって東を向いて憤然と出立してしまつた、で四日目の興行は遂に幕を開くことが出来ない状態になつてしまつた、この興行には當時のお金として約八百圓程衣裳代がかけられてあり、従つて事業上に大きな蹉跌を來し、之れが動機となつて失敗、家運衰退の第一歩を踏み出すことゝなつた、で名古屋にも居づらくなつて、遂に意を決して九代目を頼つて上京したのである、それが明治十七年の事である。

【編者附記】明治十七年七月一日には現名古屋材木商同業組合の前身たる名古屋區材木商營業組合の認ト指令が下つてゐる、西區西柳町に西柳町青物市場が開設されたのが此の年であり、名古屋市立商業學校も此の年に設立されてゐる。著者三才の時である。

上京後成田家らの引立によつて淺草附近にて衣裳屋を開業して漸く成功の域に達せんとするや災禍に見舞はれ家財凡てを烏有に歸し去り、不遇の裡に淋しき不幸な一生を終つた。明治十九年九月十八日江戸にて歿す、半七の妻は早世、文久二年六月二十六日に死亡し、後妻として中島郡一宮町より中島てつ女を娶り同棲す、中島てつは東京に於て夫半七に死別して歸名し、古郷町に居住し終生亡夫の志を繼ぎ衣裳屋を續け大正二年十二月十四日八十一才を以て永眠す。

父加藤忠平、幼名を藤三郎と稱し、明治十七年に至り忠平と改む、生年安政四年五月一日、忠平は父半七と意見合はず本家が門前町に轉じてより分家して七間町に居残り、それより京町三丁目に移り、更らに明治十四年頃桑名町三丁目に轉じ、又更らに小田原町に轉宅せり、父の性格は短氣小心の方にて清水町方面に田地を買求め鋤を擔て百姓を爲すと共に小金を各方面に貸附（當時は銀行業發達せず各所に金貸業を非公式に營む人々ありたり）又は不動産の賣買及其傍ら裁縫を習得し妙を得て一般の認むる處となり當時本町四丁目

堂々開業し居りたる大丸呉服店の專屬裁縫師となった、其後伊藤呉服店（松阪屋）より專屬店の交渉ありたるも小心短氣が障り、即ち氣儘の爲め折角の交渉も斷つた、又其の人と成りの一端を示せば趣味は将棋、笛等で将棋は仲々強く田舎初段位は指せたる由である、又年中早起の習慣ありて未明に起きて小林町在祖先の墓地へ參詣したり、東別院に參拜したり惑ひは枇杷島迄供花を買求めに行つたり實に一寸普通の人と掛離れた性格の持主であった、同時に政談演説、佛教演説等の聴取を格別好み家業を等閑に附する事などありて著者の幼時家庭で紛叫を聞いた記憶がある。父忠平には著者、清道、信行の三男と千代と云ふ一女並に後妻との間に一女とがあつた、兎も角父は一寸名人氣質と云ふ可なり奇行が多かつた様である、明治三十五年九月二十六日著者二十一才の時に四十六才を一期に大往生せり。母はかきと稱し、野田善助の次女にして東區赤塚より嫁入し、明治三十三年十二月八日著者十九才の時胃腸病の爲四十四才にて長逝す。

著者加藤清吉は明治十五年十月十八日桑名町三丁目に於て藤三郎（忠平）の長男として出生す。

幼 年 時 代

幼い頃の想ひ出は限りなく懐しまれる、そして私の腦裡を走馬燈の様に急がしく、幻燈繪の如く薄ボンヤリと去來する、急湍斬巖を切り拓く態の思ひ出や、温水柳下に澄むが如き和風のどかな思ひ出など盡くるところを知らない、主だった追憶の二、三を拾ってみよう。

春は父の背に乗って

明治二十年 六才の頃

感慨無量の四字に盡きるが、自分が物心ついた頃の記憶を辿つて春日遊山でもなく、參詣でもなく、熱田の宮まで浮れ出た當時の模様を紋景すれば、當時小田原町の宅から父親の背に負はれて徒歩で出掛けたものである、乗物などには餘程の贅澤な家庭でなくては乗らず、普通の家庭では非常の場合以外には乗らなかつたものである、父の背に乗って町から街への移り變わりをのんびり眺めつゝ行く行くに當時は名古屋も板葺の上に拳大から南